

NBF

公益財団法人 日本舞踊振興財団

Information

No.53

2018 NEW YEAR

目 次

- ◆名手訪問／対談 山勢 松韻氏
(山田流箏曲家、重要無形文化財保持者
文化功労者、日本芸術院会員)
- ◆講演会／「テレビの中の日本、舞台の NIPPON」
—アナウンサーが語る日本の芸能・魅力と楽しみ方— 葛西 聖司
- ◆日本舞踊誌上講座／日本舞踊の歴史を振り返る⑨
東京大学文学部 教授 古井戸 秀夫

- ◆JAPAN FESTIVAL
—日本舞踊五耀會とカタックダンス、インド古典音楽による公演—
- ◆特別会員芳名
- ◆NBF活動報告・行事予定・編集後記

名手訪問

《対談》

●山勢 松韻 (山田流箏曲家、重要無形文化財保持者
文化功労者、日本芸術院会員)

●西川 扇藏 (公益財団法人日本舞踊振興財団理事長)

[敬称略]



(2017年11月13日 於:西川扇藏理事長 稽古場)

西川 先生は子供の頃、どのような形でお琴の勉強をされていましたか?またどのように過ごされていましたか?

山勢 母方の叔父が3代目山勢松韻でした。母には女の子が4人産まれていて、5人目も女の子だったら養女に下さいという山勢家からの申し出があり、姉は生まれてすぐ養女として山勢家に行きました。そこで姉がお琴を始めました。養家先が亡くなってすぐ姉が帰ってきたので、私の身近にはいつもお琴があつて、音がしていました。姉は毎日のように練習をしているし、お弟子さんはお稽古にみえる。姉とは16歳違いましたから、私が産まれた時はそうとう勉強をしていて、私は身近にお琴があった

ので、入門をするとお稽古初めをするとかではなくて、自然になんとなく、遊んでいるような感覚でお琴をはじめました。はっきりとした入門の時期というのは無かったです。ただ6月6日に形式的にはじめて、それから長唄と踊りのお師匠さんの所に連れていかれたのは覚えています。お琴をやるために必要だからではなく、ごく一般の常識として連れていかれました。

西川 清元もされていますね。

山勢 長い間やめていて高校の時は国文の先生になりたいと思っていました。卒業の時期に、NHKが伝統芸能を守るというか、鍛えなければいけないという意

識からか、邦楽若手技能者育成会という邦楽演奏家育成のための講座を開校しました。長唄、清元、常磐津、尺八、三曲などの演奏者が受講していたのですが、そこで今では国宝になっているような錚々たるメンバーが集まって演奏して下さったんです。私たちは学校の先生ではないから講義はできないけれど、演奏が一番の仕事だからと言って身近で演奏をして下さった。その時にとても感動したんです。今までだらだらと聞いていたのと違っていました。これは本当に勉強したいと思い、それから本格的に始めて、芸大に入りました。

西川 本当に小さいときからお稽古されていたんですね。

山勢 たとえば10代くらいに目覚めて、「さあ、やろう」といっても出来るものではないと思います。ピアノも子供の頃から好きだという人はあまりいないようですが、やっているうちに好きになる。判断力がついてから「勉強しましょう」といつて出来るものではないと思います。だから今子供さんで年齢の低い子が習いに来ないのがとても心配です。

踊りも体を使うのだから、小さいときから始めた方が良いですよね。

西川 おそらく大人になってから始めると、まず頭で理解しようとすると思います。子供時代に無理やりであってもお稽古をして、邦楽を聴いているうちに自然に音が取れるようになってくる。それはやはり大事なことだと思います。

山勢 バレエのスタジオに行くと小さい子がタイツをはいでいる。そういう姿を見る

と羨ましく思います。あの子たちもきっと続けているうちに楽しくなってくると思います。

お稽古に行くというのは、親がその気にならないとなかなか難しいですね。

西川 今、邦楽に全く触れる機会がなく、大人になった世代が、親になっている。今やっと文化庁では伝統文化の教室を始めているようです。

山勢 歌舞伎中継もすごく減りましたね。NHKの番組でも興味のある人が少ないので視聴率がどんどん減る。視聴率が減れば番組が減る。そして観る人が減るという、悪循環ですよね。

西川 昔はNHKも舞踊や演奏をスタジオで撮って放送することが多かったようですが、今は劇場での演奏会や舞踊会を撮って放送する方が増えているようです。2月に日本舞踊協会主催の公演が国立劇場であるのですが、その公演はNHKが何番組か録画していてそれを放送しています。

山勢 日本舞踊協会、三曲協会、長唄協会、清元協会、伝統芸能の協会として何か運動を起こしたいと思いますね。

私たちも公益になって、方々へ教えにいったり、公演したりしています。

西川 都立の学校でも伝統芸能の授業が取り入れられていて、小学校などで楽器を演奏したりしているようです。小さいうちから触れさせることで普及を図っているのだと思うのですが、お琴の業界では具体的にどのような活動をされているのか教えてください。

山勢 三曲協会では何十年も前から学校に希望を募って楽器を寄贈しています。ところが教える人がいない。先生がお琴すら知らないことが多いです。一応希望はするけれど、どう活用して良いかわからない。ご要望があればこちらから行きますと言っても、それほどの熱意はないです。それでも希望があれば行って、演奏をして、「さくらさくら」を弾いてみましょう、ということはやっております。

西川 教えに行かれて子供たちの反応はどうでしょうか。

山勢 その時は興味を持つけれども、継続してお稽古する子供は本当に少ないと思います。50人いて続けてくれる子がいればいいな、というくらいです。

西川 私どもでは学校公演というのがありますて、学校に出張して講堂に舞台を作り、ホールで公演するのと同じように地方さんを呼んで舞踊家が踊るということをやっています。あとは移動芸術祭というのがあります。今公立の学校は授業のカリキュラムがとてもきついらしいです。時間が限られているため、学校の外へ連れ出して体験をさせる、ということが非常に難しいようです。ですので、こちらから行くようになる。そういう機会であっても、その時は普段見ない珍しいものなので、興味を持ってくれるのですが、そこから継続して興味を持ってくれる子は、ひとつの学校で一人でもいれば良いくらいです。

山勢 興味を持ってはじめるのにも、ある程度の判断力や鑑賞力がなければ難しいと思います。学校のクラブ活動で在

校中面白半分で習っていた子が、卒業したら思い出して始める、それでも良いと思うんです。

西川 日本舞踊では、結構お歳になられた方や、子育てが一段落して時間が出来たから始めるという方もいらっしゃいます。三曲ではどうですか？

山勢 そういう方は多いです。本来であれば子供の頃から始めて、いやでも良いから楽器に触れておく、それが理想だと思うのですが。

西川 山田流山勢家6代ということで、山田流の流れや特徴を教えてください。

山勢 徳川家康候が江戸を開いてすぐの頃、そこに住む人々は生活は出来ただろうけど、文化といえるものはまだなかった。江戸の文化などほとんどのものは上方から来るものばかりだったわけです。そんな時代にある人が上方からきてお琴を弾いていた。でも江戸の人たちにはつまらないものだったようです。自分たちに好ましいお琴の曲を作りたいと思い、そのとき既にあった河東節や一中節、長唄を取り入れて、唄ものの本位のお琴の曲を作った。それが山田流です。ようするに江戸文化を根底にして生まれた琴の音楽です。今は江戸という文化が全く生活にない、だからちょっと理解されにくいかもしれません。山田流は性格的には他の清元、長唄、常磐津に近い性格があると思います。

西川 物語性が強いんですか？

山勢 そうです。以前「鉢の木」を舞台で

ご一緒しましたが、もともとお琴は舞台芸術として出来たものではありません。舞台芸術ではなかったのが、突然、大正時代くらいから舞台に出ることになったので、劇場で鑑賞に堪えるものを作らなければいけない、ということで作られたのが「鉢の木」です。あれは物語性もありますし、とても勉強させていただきました。お琴は文化文政から明治中期くらいまでは、お座敷でお姫様や富裕階級のお嬢様と一緒に弾いて楽しむという、せいぜい室内で楽しむ教養娯楽でした。

三曲というのはお琴・三味線・尺八です。昔は尺八の変わりに胡弓でしたが、今は尺八です。以前はお琴をするには三味線もしなければいけなく、必須科目でした。昔は一応お琴の先生は胡弓もやったそうです。胡弓は機能的にバイオリンと比べられるとピッチがはっきりしない、それから楽器の機能的になかなか曖昧なところがあるので、だんだん特殊なものになってきました。でも音自体が他にないので、お芝居などでは必要なときには使われます。

演奏会で生田流と一緒に演奏する時があるのですが、大変です。手が違うこともありますし、生田流の中だけでも違いがあって、京都・大阪、ほかに九州があってそれぞれ特徴があります。この間もNHKの「芸の真髓」に全部集まって何十人かで演奏したんですが、合わせるだけでも大変でした。手を変えてみたり多数決で多いほうに決めてみたり。その調整が大変でした。

西川 演奏中に特に心がけていることなどはありますでしょうか。

山勢

踊りではよっぽどひどいことをしない限り「間違えた」ということはないかもしれません。お琴は弾く弦を一本間違えたり、同じような手でもあの手を弾いてしまったりしたら、それは「間違い」なんです。ですので物理的な練習というのがとても大変だと思います。しかもお琴と三味線と両方弾いていると、お琴で三味線の手を弾いてしまったり、ということがあるんです。そういう物理的というか具体的というか、そういう間違いをしないように練習するだけでも大変で、練習よりほかないです。



西川

我々が踊っていても三味線の音の勘所がずれただけで気になります。そのくらい音楽の場合はわかってしまう。正確に弾くことの修練がまずは大事だということですね。

山勢

上手下手はその後です。大脳の作用がなくても弾けるようではなくてはいけないそうです。そこまで何十曲も三味線と歌と練習するのは大変です。ですから私は弾くことが決まったら少しでも多く練習をします。気分よくはなかなか弾けないです。踊りは感情移入ができると思うので、気分よく踊れたということはあると思うのですが。

西川　若い頃よく聞かされたのは「今日は気分よく踊れた」なんていうときは、大概良くない。「今日はあまり自分としてはうまくいかなかった」というときは、良く踊れていることが多いと言われました。

山勢　自分で思っているのと他の人が観たのとは違うんでしょうね。でも踊りは気分良く出来たというはあると思います。それだけ役になりきって没入しないと出来ない踊りもあると思います。我々の場合は弾いている自分と、それをどこかでシビアに厳格に見ている自分と両方いなくてはいけないと思うんです。でもなかなかそうはできない。一生懸命になると自分だけになってしまします。

西川　最後になりますが、少子高齢化で日本の文化というものはなかなか省みられない世の中になってしまっていますが、先生たちはこれから次の世代に、

どういう思いを託していきたいと思われますか？

山勢　私はやはり自分のやっていることを好きになってほしいと思います。好きでなくては続けることはできません。私が始めたのも、富崎先生素敵だなとか、中之島先生の音はいいなとか思ったのが最初でした。あとはやはり良いものを見せていただきたいです。自分が出来ないまでも、また見たい、聴きたいと思って、少しでもやりたいと思わせることが大切です。「鉢の木」を観てお琴の曲でも踊っていただけるんだ、と思って下さった方もいたようですから。たくさん見せる、そうすると上手下手がわかる。違いがわかるほど見ると知識もついてくる、そういう機会を作らないといけません。

西川　子供たちへの普及公演など、それがなんとか少しでも身を結ぶようにしていきたいですね。

山勢 松韻氏 プロフィール



1932年12月6日東京都出身
東京藝術大学で中能島欣一に師事
同校卒業後大学院修士課程修了
清元志寿太夫、杵屋正邦、矢木敬二に師事
1986年より三度文化庁芸術祭賞受賞
1996年芸術選奨文部大臣賞受賞
1998年紫綬褒章受章
2000年山田流山勢家6代、3代山勢松韻を襲名
2001年1932年12月6日重要無形文化財保持者に認定
2008年日本芸術院会員
2013年文化功労者



第52回 講演会

「テレビの中の日本、 舞台の NIPPON」 -アナウンサーが語る 日本の芸能・魅力と楽しみ方-

講師 葛西聖司氏

日時 平成29年8月25日(金)

会場 東京信用金庫本店
8階ホール

葛西聖司です。元 NHK アナウンサーと紹介していただきましたが、もう退職して6年です。

NHKでしか放送していなかった、日本の伝統文化の番組や歌舞伎が好きで、舞台中継や劇場中継などの番組に興味があり、NHKのアナウンサーになりました。しかし入局して初任地は鳥取、2局目は九州の宮崎でした。中央の古典芸能や舞台中継には無縁の地で過ごしておりましたが、3局目に転勤したのが大阪でした。当時は道頓堀に芝居小屋が沢山ありました。京都には南座もあります。でもニュース番組ばかり担当していて舞台関係の仕事はなかなかこない。そうしたらようやく舞台中継が出来る事になりました。宝塚歌劇だったのですが、劇場が大好きなので嬉しかったです。それから東京に転勤してようやく歌舞伎の舞台中継を担当できるようになりました。十二代目市川團十郎襲名披露公演の舞台中継で、感激でした。やりたいという希望を言い続けるのは大事だと思いました。

私は NHK のアナウンサーをやっていて、本当によかったと思うのは、古典芸能番組

に携われたということだけでなく、様々な地域を訪ねる機会があったということです。

日本は本当に広い地域で豊かな文化があり、それぞれ違いがあるという事。その土地に行かないとわからない文化もあります。

今日の話のテーマの「日本」をローマ字にした理由はオリンピックがあるからです。オリンピックはスポーツの祭典と思っている人が多いかもしれません、そうではなくスポーツと文化の祭典です。世界中でオリンピックを開催するたびに、スポーツの祭典を実施すると同時に、その国その地域の文化を皆で紹介しましょうという、文化オリンピアードという趣旨もあります。

海外に行ってびっくりするのは、日本文化というとアニメーションなんです。日本を知る為にはアニメから入る人が多いです。もちろん日本に来たら歌舞伎や能、文楽を觀ようという方もいらっしゃるし、富士山を見たい、日本の風景を見たいという方も沢山いらっしゃいますが、今日日本の文化とは何?といったら一様ではありません。昔はまず伝統芸能がありました。以前イギリスに行った時に日本展があり、そこで飾られていたの

は、車や漫画週刊誌です。電車の中でマンガを読んでいる人がいるのは、日本だけです。それが文化なんです。そこに書かれているキャラクターが今世界中でビジネスになっている。海外から見た日本と日本から見た文化は全然違う、ということを皆さんに知って頂きたいと思います。

オリンピックというと五輪マークですが、色は青・黄・黒・緑・赤です。これは南北アメリカ・アジア・ヨーロッパ・オセアニアそしてアフリカ。この五大陸を表していますが、色が特定の大陸を意味している訳ではないそうです。それ以外にスポーツの精神や情熱、体力なども5色で表しています。それからさらに自然を現している。青は水、黒は大地、赤は火、緑は木、黄色は砂だそうです。日本でもこれらの色が大相撲や能楽に使われていて、相撲の白房、赤房、青房、黒房。また能舞台の「お幕」も五色です。しかし金沢の能舞台の幕は3色、水道橋にある宝生能楽堂の幕は4色です。かならずしも5色ではなく、使われている色もオリンピックの5色とは違います。何故かというと日本人は青というのが緑でもあり、ブルーでもあり紺でもあると捉えます。ですから緑といわないので全部「あお」なんです。青と黒と赤と黄色は五輪マークと同じですが、日本の色の残りひとつは白です。これが日本の色です。2020年の東京オリンピックの公式マークはこの白と藍色で柄は市松模様という名前が付いています。この市松模様は日本だけではなく当然世界中にあります。アメリカではチェックカーズ模様といいます。世界共通なのにこれがザ・日本ですよ、というのは市松模様が白と藍色というジャパンブルーを使っているからです。つまりよく皆さんが日本独自だと日本だけだとかいいますが、そうではなく、世界共通のなかに日本文化の中で解釈できるものがある、とい

うことがわかると面白いと思います。

皆さんに歌舞伎俳優の紋を紹介したいと思います。「重ね扇に抱柏」という尾上菊五郎家の紋があります。なぜこの紋になったかというと、三代目の尾上菊五郎が細川家の殿様から、お茶うけに柏餅を出されました。殿様が手づからではないけれど、柏餅を扇子の上に乗せて出した、それを受け取るのに菊五郎は自分の扇子を開いて受け取ったから二枚扇、重ね扇です。そして、その扇の真ん中に柏の葉が2枚描かれています。この紋にはお餅が描かれていませんが、それは食べてしまったからです(笑)。歌舞伎俳優というのはもともと、階級制度の中では一番最下級に位置していました。その中で物語を創り、これが紋所になる。日本のデザインというのはすごく面白いです。

菊五郎格子という格子模様がありますが、格子の中にカタカナの「キ」と漢字の「呂」が入っています。「キ」と「呂」は描いてありますが、「く」と「ご」は描かれていません。それは格子の線が横に5本、縦に4本あり、あわせると9本です。それで「キ」と「九」で菊、「五」と「呂」で五郎で、語呂合わせなんです。格子模様はそのほかに彦三郎格子や中村勘三郎格子などもあります。日本独特的デザインは色々あるけれども、日本は日本語を言葉遊び、語呂合わせなどで楽しむ文化というのがあるんです。

先日、宝生流の家元と一緒に仕事をしたのですが、この夏ギリシャの世界一古い屋内劇場で、能の「翁」を上演したそうです。そのときに舞いながら天井を見たら、極彩色のきれいな絵が描いてあった。その絵はその時着ていた翁の衣装の柄と同じだったそうです。「蜀江の錦」という八角形と四角形を組み合わせた柄ですが、これは中国大陆から発生して、シルクロードでヨーロッパに渡り、日本に伝わりました。八角形と四

角形の中に花柄や剣片喰、四つ花菱など細かい文様が入っている柄です。これが天井一面にあったそうです。能は600年間日本の伝統のもので伝統の柄だと思うかもしれないけれど、世界共通だということを教えてくれます。私たちは世界と繋がっている。文化オリンピアードつまり世界の中の日本ということです。

皆さん今、扇子を持っていると思いますが、これは風を仰ぐために使うから、あおぐ→おうぎになりました。扇子というと外国の人たちも踊りで扇子を使います。例えばフラメンコ、韓国の踊りも扇子を使います。西洋や韓国の扇子は布です。重さを利用して自然に落ちるように開く。日本の扇子は素材が和紙です。竹の骨を漆で塗ってあるものもあります。西洋の扇は開くことに意味がありますが、日本の扇は閉じることに意味があります。皆さんがお稽古のとき、正座して目の前に扇を置きます。これは結界です。師匠と弟子。神様と人間。置くということは、ひとつの境界線を作る道具になります。お稽古をしなさいといって師匠から扇を渡されて学びます。そして終わったら必ず閉じる。習ったことをここに閉じ込める、という意味があるんです。扇というのは風を送る道具ではなく、開いて心を受け止める道具なんです。そしてこれを閉じることを鎮め扇といい、魂を鎮め、教わったことを閉じ込める。のために扇を閉じたあとにとめる紙を「責メ紙(せめがみ)」といいます。つまり日本の文化というのは、扇ひとつ、同じ道具でも西洋とは考え方方が違います。

外国人と日本人の違いは例えば蝉の鳴き声を聞くときにもあります。日本人は左脳、言語中枢脳で聞くため、「ツクツクボウシ」「ミンミンゼミ」など日本語として捉える。しかし外国人は右脳で音楽として聞くため、雑音に聞こえるそうです。ところがこれは嘘で、

フランスに行ったときのお土産でボタンを押すとセミの鳴き声が聴こえる、というものがありました。フランス人は雑音ではなく、これを楽しんでいます。そこに行かないとわからないことでした。

先日韓国でコンクールがありました。そこでは中国の多様な民族の踊り、韓国の宮廷舞踊、日本の日本舞踊を採点します。比べて採点できるわけがないと思いました。でも日本舞踊の大坂の若い女性が一等賞になりました。同率で韓国の舞踊家も一等賞でした。国境を越えて文化を見つめあう。そういう舞台の中ではひとつなんだと思いました。日本独特のもの、日本にしかないもの、と思いがちですが、実は世界共通でその中で日本とは、ということをぜひ皆さん考えて頂きたいと思います。

2020年という年は、五輪のマークが制定されてちょうど100年です。最初からあったわけではなく、クーベルタン男爵が後になつて作ったもので、ベルギーで行われたオリンピックから採用されました。それが1920年です。それから100年経って日本での五輪。旗の色にもいろいろな意味がありました。その中に文化があるということをぜひ皆さんに覚えておいて頂いて、そして、世界中のみなさんには日本舞踊も含めた日本の伝統文化を楽しんでいただければと思います。長い時間お付き合い誠にありがとうございました。

葛西 聖司氏 プロフィール

東京都生まれ、中央大学法学部卒業。NHKアナウンサーとしてテレビ、ラジオのさまざまな番組を担当してきた。現在はその経験を生かし、歌舞伎など古典芸能の解説や講演、セミナーなどを全国で展開。執筆活動も続けている。

隅田川物の系譜⑥

東京大学文学部 教授

古井戸 秀夫

常磐津『角田川』の初演は明治維新のあと明治4年2月の東京市村座でした。辻番付の予告では「二月朔日」の初日。実際には二日遅れて「二月三日」(役割番付・絵本番付)。本名題も当初は『廻車四季翫(めぐりくるましきのわざおぎ)』。それが『梅花王戯場番組(うめさくらかぶきのばんぐみ)』になりました。角書きに「謡曲の角田川」「狂言の人力車」「祝言の石橋」と並べられた三段返しの所作事。「角田川」の表記も「謡曲」に倣ったものでした。「人力車」が発明されたのは前の年、明治3年3月。瞬く間に流行して、このときには1万台を超える人力車が東京市中を走り回っていました。題材は新風俗でも趣向は『菅原』の「車引」。3人の車力のうち髷を結った2人は両刀を手挟み、散切り頭の1人は無腰。政府の「散髪脱刀令」が発布されるのはこの年の8月でした。「車引」の時平の見立ては女形で、その役名は「富貴楼のおくら」(役割番付)。横浜に進出した芸者のおくらが御遷宮祭の手古舞で名を挙げたのは前の年の4月。富貴楼の看板を掲げるのはこの年の9月。前宣伝として話題を先取りしたものだったのでしょうか。狂言作者は二代目河竹新七こと黙阿弥。その素早い手際には驚かされます。最後の『石橋』も「富貴楼」に掛けて「富貴草(牡丹)」に戯れる獅子を「祝言」としたものだったのでしょう。

黙阿弥は渡し船を江戸の「竹屋の渡し」に見立てました。浅草の待乳山の聖天の下、山谷堀から向島の三囲神社に渡る渡し船でした。山谷堀の船宿は「竹屋」。向川岸の茶店は「都鳥」。その都鳥の茶店から「オイ竹屋の人」と声を掛けるのが江戸の風物詩でした。春爛漫の桜、そこは隅田川いちばんの花の名所でもありました。黙阿弥はこの曲を「月花の名どころ多き吾妻路に、ここをばーと庵崎

や、二となき富士と筑波根を、右と左に三囲の、堤もかすむ桜どき」と語り始めました。庵崎は小梅辺りの俚俗名。右に筑波、左に富士は『常陸国風土記』の昔から歌い継がれた名勝でした。川辺の柳が春風になびくように、子を失って狂う母は菜種の蝶に誘われて、この渡しにやって来るのでした。狂女は船に乗せられぬ、と拒まれた母は「物に狂うは我のみか、鐘に桜の物狂い、嵐に波の物狂い、我は子故の物狂い」と面白く狂うて見せるのでした。こちら辺りには一中節『賤機帶』の文句がうまく使われています。「董、たんぽぽ、鼓草」の「鼓」の連想から以前は白拍子、夫の形見の闇の扇で一指し舞を舞うところが眼目の見どころになります。黙阿弥はその詞章に「三吉野」を皮切りに「千本(ちもと)」「初瀬」「竜田」「石清水」「八幡」「山崎」「嵐山」と京や奈良の桜の名所の名をちりばめました。冒頭の江戸の隅田川の名勝と合わせて二つ、桜づくしの文句を連ねたのでした。

班女御前に扮したのは「大芝翫」こと四代目中村芝翫でした。「人力車」では散切りの車力、最後の「石橋」も大芝翫が踊りました。義太夫狂言の型物や踊りが得意で、その熊谷は「精神の團十郎」と比較されて「形容の芝翫」とされました。浮世絵師の国周に自分の錦絵より綺麗だと溜め息を吐かせたといいます。大芝翫の美称は錦絵が飛び出したようなその美しさにあったのでしょう。うわべは綺麗でも中身が薄い。黙阿弥はその点を考慮したのでしょうか、後半の梅若塚の愁嘆を削り取っていました。それどころか船に乗ることもありませんでした。元禄の昔の舞台は狭かつたので、船の内でも見せられました。山王祭の『賤機帶』の踊り台も間口二間、奥行き三間でした。広い舞台で美しく踊るには船の内は不都合だったのです。初演の舞台は常磐

津の岸沢連中だけではなく、長唄囃子連中との掛け合いでした。ここでも黙阿弥は華やかな舞台面を重く見たのでした。

班女御前の髪は「喝食」に「鬘鉢巻付」という能がかりでした。衣裳は織物の補襷の裾をお引ききずりにしているところが「形容の芝翫」なのでしょう。長唄正本の絵表紙と絵本番付では少し違いがあり、前者は柳の枝を担ぎ、後者では柳の代わりに扇を下げた棒を担いでいます。渡し守の扮装も同じで、絵本番付は袖なし羽織に竹の竿を持つ世話。長唄

正本は錦の肩衣、紋散らしの狂言袴、能茶筅の髪、手には櫂を持つ能狂言がかりの時代。横縞の脚絆は江戸の道外形のシンボルでした。世話物が苦手で時代物得意にした大芝翫の芸風を考えると、長唄正本の方が似合いそうです。渡し守の名は波作、座頭の二代目沢村訥升の役でした。梅若丸の最後を語るところでも「爺さま臼ひき、婆さまが蒸かし、じょなめく娘がこねとりに、夫（せな）アつくのも歌念佛」と戯けて踊ります。元禄以来の道外の系譜を引く渡し守でした。



〒103-0012 東京都中央区日本橋堀留町2-3-14
ツカモト堀留ビル6階

フリーダイヤル ごふくわいゴツヤ
0120-5290-58

2017年は日印友好交流年として様々な交流事業が行われ、その中で（独行）国際交流基金は10月からJapanFestivalと銘打ち、日本映画の上映や津軽三味線を中心とした邦楽公演が催されました。その棹尾を飾る事業として日本舞踊とインド芸能とのコラボレーションが選ばれ、12月8日にインド・ニューデリーのカマニオーディトリウムという劇場で、五耀會の舞踊家・西川箕乃助氏、花柳寿楽氏、花柳基氏、藤間蘭黄氏、山村友五郎氏の5名、お囃子・堅田新十郎氏、鳳聲晴久氏、カタックダンサーのサンギータ・ジャタジー氏、シタール奏者ファタ・アリ・カーン氏、タブラ奏者アマン・アリ・カーン氏による公演が行われました。内容は一昨年12月にやはり五耀會とシタール、タブラ奏者と行ったコラボレーション公演の際に上演した『三番叟』、『羽衣』の再演と、古代インドの大長編叙事詩『ラーマヤナ』でした。

今回は12月4日にインド到着、5、6日に稽古、7日舞台稽古、そして8日本番という非常にタイトなスケジュールであったため、日本で五耀會メンバーとお囃子2名で打ち合わせを重ね、大枠を組み立て渡印しました。4日は夜に到着の便だった為、5日より始動し、午前中はインド側との打ち合わせ、午後からは『三番叟』『羽衣』に分かれての稽古を行

いました。『三番叟』は一昨年と同様に西川箕乃助氏、花柳基氏、山村友五郎氏の3人で演奏家との確認、そして更に精度を上げ、通し稽古まで行いました。『羽衣』は花柳寿楽氏、藤間蘭黄氏で演じていたものを、今回は花柳寿楽氏とカタックダンサーのサンギータ・ジャタジー氏で上演することとなり、入念に打ち合わせを行い稽古を重ねていました。『ラーマヤナ』作・演出の藤間蘭黄氏は、現地日本人スタッフと共に作品で使用する布地の買い出しに奔走していました。

12月6日からいよいよ『ラーマヤナ』の稽古が始まりました。ヒンドゥー教の聖典の1つである全7巻の古代インドの大長編叙事詩である『ラーマヤナ』を藤間蘭黄氏が脚本を書き演出も行う為、事前にインド側との打ち合わせを重ねてこの日を迎えることになりました。この舞踊劇は12の場面からなり、一場面毎に稽古を進めて行きました。音楽は邦楽器のみ、インド楽器のみ、合奏のパートを使い分け、念入りな打ち合わせが行われていました。この日は朝から音楽を確認しながら振付を8割方行い、午後9時頃まで白熱した稽古が続きました。

翌7日は本番の会場を使用しての稽古となりました。午前中は『三番叟』、『羽衣』の稽古、午後からは『ラーマヤナ』の残りの部分の振付を行い、本番用の衣裳を付けての稽古を行い



ラーマヤナ

ました。

いよいよ本番の12月8日を迎え、正午過ぎに会場に入りました。『ラーマヤナ』を2回稽古し、続けて通し稽古を行い、午後7時から本番が始まりました。600人以上収容できる会場でしたが、700人以上のお客様が来場され、立ち見の方々で溢れ会場は熱気に包まれた中、幕が上がりました。

リズミカルな『三番叟』、カタックダンサーとの共演となった抒情的な『羽衣』に続き、稽古を重ねた『ラーマヤナ』を上演すると観客席は大いに盛り上がり、スタンディングオベーションが起こりました。日本の舞踊家、演奏家、インドの舞踊家、演奏家の想いが融合し、素晴らしい作品を生み出すことができました。

9日には在印度日本大使館にて日印友好交流年のクロージングイベントに参加し、『鶴の声』を山村友五郎氏が、『松の緑』を西川箕乃助氏、花柳寿楽氏、花柳基氏、藤間蘭黄氏で踊りました。大使館にお見えになられていた方々より、前日の公演に対するお褒めの言葉をたくさん頂戴し、今公演の成功を確信することができました。

この度の公演にも出演されていたサンギータ・シャタジー氏、ファタ・アリ・カーン氏、アマン・アリ・カーン氏、計3名を招聘し、凱旋公演を行う予定となっています。印度の皆さんにお届けした感動の舞台を是非とも日本で再現し、ご覧頂きたいと思っています。



羽衣

『ラーマヤナ』配役	
ラーマ	藤間蘭黄
シータ(妻)	サンギータ・シャタジー
ラクシュマナ(異母弟)	花柳寿楽
ダジャラ王(父)	西川箕乃助
シュールバナカー	
(敵役ラーヴアナ妹)	
スグリーヴァ(味方猿王役)	
バラタ(異母弟)	花柳基
ジャターユ(鳥の王)	
ハヌマーン	
(猿王の配下、風神の化身)	
カイケーイ(王妃)	山村友五郎
ラーヴアナ(敵役の王)	
アグニ(火の神)	
	(敬称略)



三番叟



カーテンコール

特別会員 ご芳名

日本舞踊振興財団では、特別賛助会員制度を設け、下記の方々にご支援を
いただいております。是非ご参加をお願い申し上げます。

- ◎会費 1口 10万円(1年間)
- ◎特典 会報のご送付
会報・公演プログラム等にご芳名掲載
財団主催イベントにご招待

飯 田 侃	竹 内 小 道 具 (演劇舞踊小道具店)
飯 田 君 子	東 京 信 用 金 庫 (理事長 半澤進)
飯 田 信 子 (飯田不動産 代表)	東 信 企 業 (株) (代表取締役 金澤克夫)
市田(株)井筒工芸ディビジョン	西 川 井 扇
(有)かつら大阪屋 (代表取締役 長坂誠一郎)	(株) 西 菱
金井大道具株式会社 (代表取締役 金井勇一郎)	NPO 法人日本伝統芸能振興会 (会長 石田寛人)
歌舞伎座舞台 (株)	NPO 法人日本文化研究所 (理事長 木村知躬)
(有)ギャラリー竹柳堂 (代表取締役 藤澤繁)	(株)ビデオフォトサイトウ (代表取締役 斎藤政雄)
向 陽 開 発 (株) (代表取締役 鈴木甫沙子)	(株)ホテルオークラ東京 (代表取締役社長支配人 清原當博)
松 竹 衣 裳 (株) (代表取締役 酒井誠一)	藪 本 俊 一 (株)古美術藪本 代表取締役)
セガサミーホールディングス(株) (代表取締役会長兼社長 里見治)	山 本 化 学 工 業 (株) (代表取締役 山本富造)
関 根 愛 子	(株) 吉 岡 (代表取締役 清水喜重郎)
(株)瀧川峰晴堂 (代表取締役 瀧川明行)	

◆財団の趣旨にご賛同いただける方は財団事務局までご連絡ください。特別会員について
ご説明いたします。その上でご希望の方には申し込み書類をお送りさせていただきます。
財団事務局 TEL 03-3354-5496

NBF活動報告

◆新宿区「こども文化体験プログラム」－日本舞踊－

日 時：平成 29 年 8 月 2 日(水)～4 日(金)
 会 場：新宿四谷地域センター多目的ホール
 内 容：新宿区主催の子供達の体験教室

◆第 52 回講演会

日 時：平成 29 年 8 月 25 日(金)
 会 場：東京信用金庫本店 8F ホール
 演 題：「テレビの中の日本、舞台の NIPPON」
 - アナウンサーが語る
 日本の芸能・魅力と楽しみ方 -
 講 師：葛西聖司

◆新宿区日本舞踊こども教室

日 時：平成 28 年 10 月 8 日(日)
 ～平成 29 年 1 月 21 日(日)
 会 場：新宿区四谷地域センター多目的ホール
 内 容：文化体験プログラムを更に発展させ、
 日本舞踊の基本を曲にあわせて踊る。
 最終日に発表会を行う。

◆JAPAN FESTIVAL

(日本舞踊五耀會とカタックダンス、インド古典
 音楽のコラボレーション)
 日 時：平成 29 年 12 月 4 日(月)～11 日(月)
 場 所：ニューデリー（インド）
 主 催：独立行政法人国際交流基金
 内 容：昨年行ったインド公演を更にグレードアップ
 したコラボレーション公演。



© One Frame Story

公益財団法人日本舞踊振興財団 「NBF」 No.53

発 行 公益財団法人日本舞踊振興財団
 〒162-0065 東京都新宿区住吉町
 10-8 片桐ビル 301
 印 刷 株式会社デイエムピー
 発行日 平成 30 年 1 月

NBF行事予定

◆新宿区小学校鑑賞教室

日 時：平成 30 年 2 月 10 日(土)
 会 場：早稲田小学校

◆幼稚園おどり教室

日 時：平成 30 年 2 月 21 日(水)
 会 場：東洋英和幼稚園

◆仕舞・狂言教室合同発表会

日 時：平成 30 年 3 月 15 日(木)
 会 場：西川扇藏稽古場

◆鑑賞の日

日 時：平成 30 年 6 月 12 日(火)
 会 場：東洋英和小学部

◆宇都宮市日本舞踊鑑賞教室

日 時：平成 30 年 6 月 26 日(火)
 会 場：栃木県宇都宮市

◆日印芸術の祭典

(五耀會舞踊家とインド人アーティストによる
 コラボレーション公演)
 日 時：平成 30 年 7 月 3 日(火)
 会 場：国立劇場小劇場



福集後記

新年明けましておめでとうございます。

今年は7月にインド公演の凱旋公演を行う予定となつておなり、また新規海外公演も模索しております。国内外で当財団の活動をより活発に行う予定となつております。皆様には是非暖かい目でご後援頂ければ幸いでございます。



公益財団法人 日本舞踊振興財団

〒162-0065 東京都新宿区住吉町 10-8 片桐ビル 301

TEL・FAX : 03-3354-5496

<http://www.nihonbuyo.or.jp>

E-mail: office@nihonbuyo.or.jp